

## 兩祖一體の宗風

保坂玉泉

我宗が高祖承陽大師と太祖常濟大師との兩祖一體の宗門であることは宗憲に依つて規定せられ嚴然たる宗格を成して毫も動搖が無いのであるが、一般には唯だ宗憲の規定とか同一傳燈と云ふ極めて外形的な理由に止まつて兩祖の御人格並に聖教の本質的方面の検討を怠り、宗乘的に兩祖一體を論ずるに至らぬのは甚だ遺憾である。兩祖は外形的に觀るならば歴史的に佳なり相違の點が多いが、然し兩祖の宗教の本質的方面を比較研究する時に完く兩祖同轍一味なる所以が明かで、斯くして眞に兩祖一體の宗門たることを唱道する事が出来る。これは最も大切な研究であるが却つて從來等閑に附せられたのである。吾人は以下聊か文獻を得て兩祖一體の宗風を驗證することが出来たから學徒の參考に供したいと思ふ。

一

道元禪師の行跡に就て考ふるに禪師は復古の宗風を保たれたことが明かである。彼の山居の偈に「西來祖道我傳東、釣月耕雲慕古風、世俗紅塵飛不到、深山雪夜草庵中」とは最も能く復古慕古の風を現はして居られる。高祖が叡山を下り入宋せられたのは眞實の佛法を求められたのであるが、眞實の佛法は當代には支那にも容易に求むべくもあらず、然るに遂

に淨祖に見ゆることを得て眞箇の佛法を證得せられた、而して淨祖は實に復古の宗風を唱へられた方であつて、此點が兩祖の契合一致せるところであつた。又高祖が六祖を曹谿古佛と尊稱し、その古風を慕ひ更に達磨の純禪を擧揚せらるゝ一方百丈の古規を實踐修行に取り込み、更に遙かに佛陀の正法に復歸し、佛心を單傳し（佛心卷）佛衣にあらざれば着せず（袈裟功德卷）佛作佛法を行とし（行佛威儀の卷）、遂に入滅迄も佛陀に擬せられた（八大人覺）ので高祖の御一代の行跡は完く古風を慕ひ古風を行ぜられたと見るべきである。

『傳光錄』淨祖章に「實ニ道德當世ニナラビナク操行古今ニ不群ナリツネニ自稱シテ曰ク一二百年祖師ノ道スタレ一二百年間ヨリコノカタワガゴトクナル知識イマダイデズ」とあり。淨祖の時代は宋末にして唐代純禪の風廢れ眞實の佛法地を拂ひ、依て淨祖は獨り古風を慕ひ古規に順ぜられ、當代一人の知識たりしことが明かである。又曰く「ユヘニ諸人者第一道心ノ事ヲワスレズ一一ニ心ヲイタラシメ實ヲモハラニシテ當世ニ群セズシテ古風ヲ學スベシ」と、これ又淨祖の言を傳へたもので、淨祖が復古禪を唱へられたこと最も明鏡である。高祖入宗の時多くの人師があつたに拘らず獨り淨祖と機緣投合したのは一にはこの淨祖が復古の宗風眞實の佛法の傳持者であつたからである。故に『傳光錄』高祖章に「時澆運ニムカヒ世ノ末法ニアフテ大宋モ佛法スデニ衰微シテ明眼ノ知識マレナリユヘニ汎無際琰浙翁等ミナ甲刹ノ主ナルト雖モナライタラザルトコロアリユヘニ大宋ニモ人ナシトオモフテ歸朝セントセシトコロニ淨和尚ヒトリ洞山ノ十二世トシテ祖師正脈ヲ傳持セシニナヲ神秘シテモテ嗣法ヲアラハサズト雖モ師ニハカクストコロナク親訣ヲノコサズ祖風ヲ傳通ス」とあり之に依りて當代の宗風淨祖高祖師資契合の消息を知ることが出来る。以上太祖の『傳光錄』の御文のみを擧げたのは、太祖の淨祖觀高祖觀を示したもので、太祖が此の兩祖を御賞揚せられて居らるゝので三祖同轍の祖意を驗證するに最も適

當であるからである。即ち淨祖も高祖も又太祖も共に復古の宗風を持せられしことは全く一致する點である。

二

復古の宗風と云ふことは結局純一の佛法を求めるといふことであつて、兩祖の宗風は此點に於て又一致するのである。達磨大師乃至六祖大師の佛法はその純一なる所に特色があつた。祖師達磨大師は一經一論を傳へざればその西來意に就ては種々問題も起つたが、彼の黃蘗の『傳心法要』には「達磨大師到中國唯說一心唯傳一法以佛傳佛不說餘佛以法傳法不說餘法」とあり、又「祖師西來唯傳心佛」、「又達磨從西天來唯傳一心法」等とあり、馬祖も「達磨大師從南天竺國來至中國傳上乘一心法」と言ふて、西來の祖意が純一佛法の傳來であることは符節合する所である。故に高祖も『辨道話』に「大宋國も後漢よりこのかた教籍あとをたれて一天にしけりといへども雌雄いまださだめざりき、祖師西來のち直に葛藤の根源をきり純一の佛法ひろまれり」と云はれた。又六祖大師は『壇經』に於て「菩提自性本來清淨但用此心直了成佛」(行田章)、「若於一切處行住坐臥純一直心不動道場眞成淨土此名一行三昧」(付囑章)等と云ふて純一の佛法を強調擧揚せられた。

然るに唐宋宋代に至り禪風大變して漸く雜信雜行盛にして純一の風を失ひ禪弊益々生ずるに至つた。或は五家各宗を執し、或は規矩作略を設け、或は奇言畸行を弄し、或は公案禪を作し、曰く教外別傳、曰く禪淨習合、曰く儒佛一致等々その禪弊擧げて數ふべからず。高祖大師は『正法眼藏』の隨處に於て是等の禪弊を假借なく斷破されて居らるるの蓋し純一の佛法を顯はさんが爲めに外ならぬ。且つ高祖大師が純一の佛法を擧揚せられた文献も少くない。『學道用心集』には

「行者不可<sub>レ</sub>念爲<sub>二</sub>自身<sub>一</sub>而修佛法不可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>名利<sub>一</sub>而修佛法不可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>得果報<sub>一</sub>而修佛法不可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>得靈驗<sub>一</sub>而修佛法焉但爲<sub>二</sub>佛法<sub>一</sub>而修佛法<sub>二</sub>乃是道也<sub>一</sub>とあり、是れ恰かも日蓮聖人の四箇格言の如く當時の佛教の弊を擧げ他宗の非を打破し純一の佛法を強調せられたものである。その純一の佛法とは何ぞや、『辨道話』に「宗門の正傳に曰くこの單傳正直の佛法は最上のなかの最上なり參見知識のはじめよりさらに焼香禮拜念佛修懺看經をもちゐすただし打坐して身心脱落することを得よ」とあり、此言は『寶慶記』等に依れば本師如淨禪師の垂示に基くものであるから、淨祖高祖同じく純一の佛法を持せられたるや明かである。又『卽心是佛』の卷には「佛々祖々いまだまぬかれず保任し來れるは卽心是佛のみなり」、又「正傳し來れる心といふは一心一切法一切法一心なり」とあり、又『永平廣錄』に「朔旦冬至上堂曰天得一清地得一寧人得一安時得一陽」とあり、高祖が純一の佛法を保たれしこと愈々明かである。

次に太祖大師は如何、『傳光錄』高祖章曰「東林惠徹和尚ノ宗風榮西僧正相嗣シテ黃龍ノ八世トシテ宗風ヲ興サントシテ興禪護國論等ヲツクリ奏聞セシカドモ南都北京ヨリササヘラレテ純一ナラズ顯密心三宗ヲオク然ルニ師ノ嫡孫トシテ臨濟ノ風氣ニ通徹スト雖モナホ淨和尚ヲトブラヒテ一生ノ事ヲ辨ジ本國ニカヘリ正法ヲ弘通ス」とあり。此文献は頗る重要なもので此場合特に大切なものである。即ちこれは太祖が高祖を記せられた御言で此中に榮西、如淨兩禪師に言及してあつて、結局此四禪師の宗風を比較する重要な史料である。殊に純一なる佛法に就ての比較であるから此場合特に重要である。高祖は純一ならざる榮西禪師の宗風と異りたる淨祖の佛法を訪ねられたのであるから淨祖が純一の佛法の傳持者であることは明白である、而して此純一の佛法の相承を賞揚せらるゝ太祖大師亦た純一の佛法の弘通者であることが明かである。畢竟右の文献は淨祖高祖太祖三師が純一佛法の傳持者である點が全く同轍なることを證して餘りあるのである。

次に兩祖の宗旨は教禪一味の家風を持せられた點が相共通する所である。教禪一味とは佛教と禪と同一なること、教意と祖意と同轍なることを云ふ。古來禪宗を稱して不立文字教外別傳と云ひ、佛教の外に特別なる宗旨あるが如く自らも言ひ他からも觀られて居るが之は誤つた考である。支那佛教が一經一論を偏執して宗旨を立て經論に固執して實踐的禪觀なきに對し禪宗が特に禪觀を強調したので此宗風を教外別傳と唱へるやうになつた、然るに佛教以外に特別なる禪宗ありと解するのは大なる誤である。禪宗は教禪一味教意祖意同轍なりとするのが兩祖の精神であり禪宗の本領である。

されば古來純然の祖師は何れも經教を依用せられ毫もこれを排せられなかつた。達磨大師は『楞伽經』を心要とし、その『四行觀』は『金剛三昧經』に依り、三祖大師の『信心銘』は『華嚴』等の要旨を貫き、六祖大師は『金剛經』に依り、石頭大師の『參同契』は大小乗の法相を用ひ、洞山大師の『寶鏡三昧』は『法華』『涅槃』等の教相を依用する等、以上の祖師は皆三乘十二分教を用ひて禪の心要とせられ、教禪を別觀することが無かつた。又古來禪宗に於て盛に用ひてゐる有名な文言は何れも諸大乘經から引いたものであつた。經教の指月の喩、「不說一字」の語は『楞伽經』より、禪の一點、「直心是道場」の語は『維摩經』より、「三世心不可得」は『金剛經』より、「唯佛與佛乃能窮盡」「諸法實相」「一大事因緣」「開示悟入佛之知見」「深入禪定見十方佛」「唯有一乘法無二亦無三」「是法住法位世間相常住」等は『法華經』より、「三界唯一心心外無別法」「心佛及衆生是三無差別」「破塵出經」「一切衆生具足如來智慧德相」は『華嚴經』より、「一切衆生悉有佛性」は『涅槃經』より、「佛之眞法身猶如虛空應物現形如水中月」は『金光明經』より出でたもので、禪の思想は大乘經

教の眞髓をその儘現はしたもので、教意祖意は完く一なのである。此點は兩祖又同轍であつて、殊に高祖の『正法眼藏』に於ては大乗經は勿論小乗の經律までも頗る多く引用依用せられてゐることは注意すべきで、高祖にありては是等經教は大小乘に拘らず何れも佛心佛意の顯現に外ならぬから佛心單傳の宗として當然であつたのである。

高祖が教外別傳を批難せられた文献は澤山あるがその主要なるは『佛教』の卷であらう。此卷には三乘十二分教と異りて教外別傳直指人心見性成佛の上乗一心の法ありとする説に對し高祖は「この道取いまだ佛法の家業にあらず……かくのごとくの漢、たとひ數百千年のさきに先達と稱すとも恁麼の説話あらば佛法佛道はあきらめず通ぜざりけるとしるべし」と宣ひ更に「たゞ一心を正傳して佛教を正傳せずといふは佛法をしらざるなり」といひ、是等を教外別傳の謬説と斷定せられ巴陵の祖意教同別の話、玄沙の三乘十二分教即不要の話を批判せられ、更に三乘十二分教九部經を列述して後「これみな佛祖の眼睛なり、佛祖の骨髓なり、佛祖の家業なり、佛祖の光明なり、佛祖の莊嚴なり、佛祖の國土なり、十二分教をみるは佛祖をみるなり、佛祖を道取するは十二分教を道取するなり」と云はれ又「三乘十二分教等は佛祖の眼睛なり、これを開眼せざらんものいかでか佛祖の兒孫ならん、これを拈來せざらんものいかでか佛祖の正眼を單傳せん、正法眼藏を體達せざるは七佛の法嗣にあらざるなり」と結言されてゐる。高祖が教意祖意完く一なりとの見解は最も明かである。其他『永平廣錄』七にも「猥號禪宗而謬雌雄於法華華嚴等之宗。所以澆季無人也……然則法華華嚴等八萬四千法藏悉是佛祖單傳也。非法華華嚴等外別有祖師道也」とあり、高祖は單に一經一論に限りて教とは云はず、假令小乗でも三乘でも『阿含』でも法華華嚴でも悉く佛心佛意の顯現なれば同等に之れ取り少しも取捨せず且かも是等教經即ち禪教なり教意即祖意なりと決擇せられたのである。

此の如きは先きの淨祖、後の太祖に亦た一貫せる宗義であつた。此兩者には多くの文献は無いが次の片鱗に依りその眞意を知るに充分である。『寶慶記』に淨祖の言として「祖師兒孫不可強嫌ニ大小兩乘之所說」とあり、瑩祖は『十種勅問』に「勅問一日祖意教意是同耶是別耶師曰祖教如ニ水波ニ豈有レ異耶ニ雖然教者多是纏ニ教網ニ不能レ落洒ニ故古來參ニ祖意得レ旨者甚多矣」と述べられてゐる。兩祖が教禪一味教意即祖意の宗風を持せられたことは疑ふ餘地が無い。

#### 四

教禪一味の宗旨は結局行持に依らざれば成立せない。凡そ體驗に因る宗教は行持を生命とする、行持なき宗旨は全く畫餅に過ぎぬ。兩祖の宗教は實に行持の宗教であり體驗の宗教であつて、此點完く一致するところであつた。極めて概括的に云へば高祖の『行持』の卷に對し太祖に『傳光錄』あり兩者は佛祖の列傳ではあるが單なる史傳に非ずして寧ろ佛祖の行持の洪範を示されたものである。又高祖の『永平大清規』に對して太祖の『瑩山清規』あり、一體清規は書物の上からも實際的にも我宗に於て特別な發達をなしたもので、清規は我宗の獨占と云ふも過言でない、是れ蓋し兩祖が清規を重用せられ行持作法を是れ宗旨とせられたからである。而して此行持は坐禪の一行を以て統攝せらるるもので、之に就て高祖の『普勸坐禪儀』に對し太祖に『坐禪用心記』あり、何れも坐禪の一行を以て一切を窮盡して居らるゝことはその軌全く一である。此の如く兩祖の御撰述には特に行持に就て符節を合するが如きものがあつて、兩祖一體の宗風愈々明かである。佛陀の宗教が禪定を本質とし禪定を行の最高徳目とし禪定を以て他の行を統攝せることは佛陀の行跡や教義に就て着取することが容易である。即ち佛陀はその修行時に於て事火等の祭儀、外道の苦行、四禪八定等の禪定等を歴訪歴事せられ

たが、最後に前二者を棄てて後の禪定を選ばれたことは史實に明かなところである。従つて佛陀の示されたる實踐的教義は正見正思正語正業正命正勤正念正定の八正道説にしても、布施持戒忍辱精進禪定智慧の六度説にしても、戒定慧の三學説にしても、何れも禪定を最高徳目とし禪定に依つて一切行を統攝してゐる。十二因縁説の如きはそれ自體が禪觀の過程である。右の諸説中智慧と禪定とが別であつて且つ智慧が禪定の上にあるが、これは六祖大師が『壇經』に「定慧一體にして二にあらず……定慧等學……」(定慧章)と云へるが如く止觀一體と見てもよし、又四諦教相に於けるが如く慧を以て行の果たる佛涅槃の境の本質と觀るも可なりであるから、禪定は依然として行の最高徳目とすることは差支な  
 5。

佛心單傳正法相續を自任する禪宗は佛陀の禪定中心主義を繼承して禪定を以て六度萬行を統攝する一行三昧を保持しこれを亦た王三昧と名けたのである。傳翁は「安住王三昧萬行悉圓收」と云ひ、六祖大師は「若し一切處に於て行住坐臥純一直心にし道場を動ぜず直に淨土を成ずる此を一行三昧と名く」(付囑章)「一行三昧とは一切處に於て行住坐臥常に一直心を行ずる是なり」(定慧章)とあり、此中直心とは坐禪のことであることは、高祖が『三昧王三昧』の卷に「結跏趺坐は直身なり直心なり直身心なり」と言はれて居ることでも明かである。

高祖が坐禪の一行を強調された文言として御撰述の隨處に發見せられるのは「不用燒香禮拜念佛修懺看經只管打坐」の文であるが、この思想は勿論文言まで天童淨祖から直傳せられたものである。『三昧王三昧』の卷に「先師古佛云參禪者身心脫落也祇管打坐始得不要燒香禮拜念佛修懺看經、あきらかに佛祖の眼睛裏に打坐すること四五百年よりこのかたはただ先師ひとりなり震且國に齊肩すくなし」とあり。之に依りて坐禪が佛法の正傳なること、その正傳者淨祖が達磨六祖當時

の純禪の唯一人の再興者なることが知られる。又「あきらかに知りぬ結跏趺坐これ三昧王三昧なりこれ證入なり一切の三昧は此王三昧の眷屬なり」とあり。高祖は淨祖の佛法をその儘正傳せられて禪定の一行三昧に安住せられたのである。

太祖は『坐禪用心記』に於て坐禪の王三昧を強調せられ、此には一切の佛法を統攝せることを力説せられて居る。即ち坐禪は聞思修の三慧、教行證の三徳、聲聞の四諦十六行相、緣覺の十二因緣、菩薩の六度萬行、四安樂行、戒定慧の三學等の法門に比するに是等の一分に位するものに非ずして、是等に超越し是等を攝盡せることを委説せられてゐる。例へば「非<sub>二</sub>聲聞十六行<sub>一</sub>非<sub>二</sub>緣覺十二行<sub>一</sub>非<sub>二</sub>菩薩六度萬行<sub>一</sub>一切不爲故名爲佛只安<sub>二</sub>住諸佛自受用三昧<sub>一</sub>遊<sub>二</sub>戲菩薩四安樂行<sub>一</sub>是豈不<sub>二</sub>佛祖深妙之行<sub>一</sub>と云ひ、「諸佛教門一代所說無<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>總收<sub>一</sub>戒定慧中今坐禪者無<sub>レ</sub>戒不<sub>レ</sub>持無<sub>レ</sub>定不<sub>レ</sub>修無<sub>レ</sub>慧不<sub>レ</sub>通降魔成道轉輪涅槃皆依<sub>二</sub>此力<sub>一</sub>神通妙用光說法盡在<sub>二</sub>打坐<sub>一</sub>と云ふが如き、何れも坐禪を以て佛法の正門とし佛教を統一して居る。此點は全く高祖が『辨道話』に「六度および三學の禪定にならつていふべきにあらず……これは佛<sub>○</sub>法<sub>○</sub>の<sub>○</sub>全<sub>○</sub>道<sub>○</sub>なりならべていふべき物なし」と云はれたのと軌一あるものである。

以上は主として兩祖の御撰述に依つて且らく復古思想、純一の佛法、教禪一味、一行三昧の四大方面から比較し奉つて兩祖一體の宗風の理論的歴史的實證をなしたものであるが、その他の資料に依り他の觀點から尙研究する所が澤山残つてゐる。これは今後を期し或は後賢に委するのであるが、然し何れから研究しても前記の太綱は決して動かぬもの寧ろ此大綱を微細に立證することになるであらうと信ずるものである。